千葉工業高等学校　創立60周年記念誌(千葉工業同窓会)より

千葉工業の歴史を語る　その二

第5代学校長　景山　徳二　先生

（文章の中で私とあるのは景山先生ご自身である）

○全面移転の問題点の数々

①先ずは財源の問題が第一である

津田沼の校地が相当の値段で売れなくてはならない。これは県のやるべき仕事で校長の仕事ではないが、私がやらなければ実際には進展しない。

私としてはこの土地を最も有効に活用できるのは京成電鉄(株)しかないと思ったが、なかなか話に乗ってこない。

他からいろいろ話が出るが、教育施設であるからつまらぬ所に渡すことはできないし、また分割して売却も容易ではない。特に周囲を京成電鉄(株)に取り囲まれているので不利である。結局当時の高木教育委員長と萱野財務課長と私の三人で上野にある京成電鉄(株)の本社に行って、当時の川崎社長、福田専務と面会、最後の交渉をしたが値段が折り合わず断念した。

その後住宅公団等からも、京成電鉄(株)に申し出た金額以上で申し入れが来た。驚いたことに京成電鉄はこの事態を察知したのか、県と直接交渉をして一応妥当な線で決定してしまった。

県の高木教育委員長が大変腹を立てられたこともあって、私も京成電鉄(株)の福田専務に「山師のようなことをするんだね」と言ったことを思い出す。

この契約成立によって急転直下、遅くとも2年後には全面移転を完了して校地を明け渡すことに決まった。

②習志野市に対する問題点

県立高校の誘致に対しては各市とも非常な努力を払っている現状に対し、既存の高校が他の市に移転するのであるから、習志野市としては大きな問題である。市長としても困ったと思う。私としては、移転問題は未定未定でボカすようにしていた。

職員会議でも、PTAの会合でも同様で、「これは県のやることで校長には決定権もない。しかし皆さんに悪いようにはしないから、この問題は任せてほしい」の一点張りで通した。

下手に職員や生徒、PTAに動かれると、政治的な問題も入ってくることが予測される。これを一番心配していた。

しかし、何といっても最後には市長に会って事情を話さなければならない。私は怒られることを承知で当時の白鳥習志野市長に面会した（市長とはこの問題ではこの時一度だけしか話し合いはしなかった）。

「市長さん、千葉工業高校を今度千葉市の方に移転したいと思います」と言ったとたん「君、何を言うんだ。県立のない市がどこにあるか。千葉に行くなら行ってみよ、山下教育長を首にしてやる」と頭ごなしに怒られた。

「市長さん、私は現在のままでは生徒が可哀想だと思っているだけで、習志野市でこの問題を解決して下さればこれにこしたことはありません」「県立の問題は県の責任でやること、市は市立の高校まで建てている。それで精一杯だ。ともかく承知はできない。会議が有るから失礼する」と市長室を出て行ってしまったので、煙草を一服していると、ちょっと市長室に戻ってきて「景山君、市長には市長の立場があるよ」と言ってまた出て行ってしまった。

白鳥市長と言えば、全国市町村長会の会長で、知事に匹敵する実力者であったので、容易ならぬことになったと思った。山下教育長にその話をすると「俺を首にするか」と笑っていたので安心した。

地元山村県議や次の市長大塚氏など、随分習志野市の皆さんにはお世話になっていながら、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。恩を仇で返す結果になってしまった。

③高速有料道路が校庭を貫通する計画があったこと

この問題は初め全然知らなかったし、こうした計画もなかった。県と市と国の連絡が不十分であったことから生じた問題である。

国の発表した道路公図には、大巌寺付近を通る高速有料道路が産業道路に接続するため分岐して、校庭予定地を通ることになっていた。これは当然市の土木部の承認を得て作成したもので、このとき学校の敷地を通ることに気づかず図面を作って公示してしまった。

一度公示された図面は3年間は修正不可能。付近の土地の売買等にも関係するからであろう。

これは大変な問題で、この図面の変更をして貰わねば学校は建設できない。市の土木部長も頭を抱えるのみ。市長は「私が建設大臣に直接交渉するから心配するな」と言ってくれるが、萱野財務課長も困って、「この問題が決まらなければ県会に移転計画は出せない」とのことであった。県会で質問でも出たら答弁のしようがないとのこと。半年の交渉の結果、公団の変更はできないが県が責任をもって学校の校地を避けるとのことを信頼して、初めて県会に学校移転計画が出される段階になった。

④生徒、職員の通学、通勤の問題

何分習志野市からの距離が相当あるので、現在いる人々には所要の時間で困る者が多数出た。特に定時制の生徒は職場からギリギリの時間で通って来ているので、移転することにより通学不可能になり、学校をやめなければならない生徒も出てくる。私の一番頭の痛い問題であった。こうした生徒に対して、職安を通じて京葉工業地帯の工場に転勤させたり、市川工業高校定時

制に転校させたり、本当に非常手段であったが、皆よく事情を了解してくれて有り難かった。

また職員も同じで、交通の関係から他校を希望する者は全員その希望に沿うよう処理した。移転の年の教員の歓送迎会は48名の多きに達した。

⑤移転作業について

普通高校でさえ大変であるのに、工業高校は実習設備が加わっている。距離も遠い。しかしこの難事業を職員・生徒一丸となってやり遂げた。

しかも不平不満の声も聞かなかった。3月の休みを返上してのことであった。

関係者一同に心より感謝している。

⑥新校舎の建設について

萱野財務課長と協力して、全国一の工業高校の建設を話し合った。

当時県立浜松工業高校が全国一であろうと文部省・土井視学官（元千工職員）から聞いたので、丁度日教組のストの日で学務課から校長の足止めを申し渡されていたが、予定していたので視察を強行した。

神奈川県・静岡県の工業高校と特に浜松工業高校も視察した。この程度ならもっと立派なものをとの確信を得た。各県ともスト騒ぎで、よく校長が出て来たものだと驚いていた。

校舎の設計に当たっては、産業教育振興法の新基準100％に準拠、実験、実習、特別教室は各科担当の教師に責任をもって研究させ計画させた。

視聴覚室も作ることにした。私は玄関はただの出入り口ではない。学校の顔だからできるだけゆったりと、廊下は通路だけでなく生徒の気分転換の大切な場だからできるだけ広くとるよう、従来の学校のように棟を別々にして廊下で結ぶことをやめて一つにし、この廊下の分だけ広くするように。生徒も正面から入るように。校長室、事務室は出来るだけ開放的にすること。機械、電気、化学と積載量の大きな順に１階、２階、３階、４階と実習室、教室を配列すること等、設計上工夫したつもりである（設計者は京都に本社がある富家建設事務所）。

坪単価が高くてこれは実現しないと言われたが、これも押し切ってしまったし、また京葉工業高校に比して床面積が大きすぎるから減少するようにと県の財務課から言われて、教育庁財務課が困ったので、私は直接財務課の担当と会って了解を得た。

○落成した新校舎

昭和43（1968）年6月15日、創立33周年記念と併せて新校舎落成式を盛大に挙行した。

来賓の鈴木教育長も「わずか1年有余でこれだけ完備した、全国に威容を誇りうる新校舎の誕生に心から祝意を表する。更に今後はこれに相応しい内容を盛ることであろう」と申された。

またこの落成式の際に、かねて県立千葉東高校長・澤田繁二氏（後に第6代千葉工業校長）に新校歌の作成を依頼してあったが、有名な作曲家・清水脩先生の作曲、澤田先生の作詩で「まむかいに富士の根望むひとところ」の新校歌の発表があった。格調の高い校歌だと思っている。

私としてはこれで永年の夢が実現、幾多の困難を乗り越えて来た思い出を、生実台に高くそびゆる立派な学校を見るにつけ、懐かしく思っている。

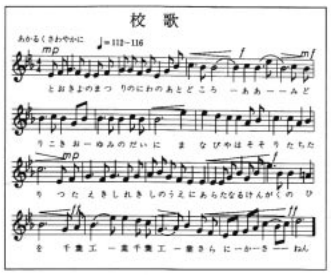
また、多くの人々の協力を今更ながら深く深く身に沁みて、感謝の念でいっぱいである。

校　　歌　　作詞　沢田　繁二　作曲　清水　脩

1．遠き世の　政の庭の　あとどころ
緑濃き　生実の台に
まなびやは　そそり立ちたり
伝え来し　歴史の上に
あらたなる　研学の日を
千葉工業　さらに重ねん

2．まむかいに 富士の根望む ひとところ
風薫る　生実の台に
若人は　集い来れし
こころざす　科学の道に
ひそかなる　情熱の火を
千葉工業　いまや灯さん

3．この海は　世界の潮　寄るところ
窓明き　生実の台に
われらみな　未来をになう
ひたすらの　努力ののちの
たくましき　飛躍の朝を



付　記

①創立記念日のこと

昭和11年(1936年)5月5日、開校式挙行(仮校舎)鯉のぼりを高くあげて誕生日を祝す。

以後創立記念日にはこの鯉のぼりをあげたが、戦災で焼失、戦後5月5日が祝日となったが、当時は代休をとるようにしていた。

②学校の所在地について

千葉市中央区今井町147番地となっているが校地の道路よりの入り口のところで、一寸無理のある決定であった。生実町にするのが妥当であったが、当時職員の勤務地手当の関係で今井町なら旧市内になり、手当が1号程有利になるので無理して決定した。

③津田沼校舎からの名残のもの

イ、前庭車回しの松とその近くの松数本

ロ、校長室の丸テーブルと椅子

ハ、バックネットの鉄骨（これは津田沼校舎の防空壕の中にあったレールを使用）

ニ、運動部の部室（津田沼校舎の産業振興事業で建てた実習室を移転）

④君待橋の標石について

これはよくわからないが、君待橋は都川仮校舎のすぐ近くにあったので、この標石は検見川台へ移転の際、移動、更に津田沼校舎に運搬されたと思う。生実校舎に移転の際、正門の近くの庭にあったのを運搬させたと思っている。新校舎の前庭の隅に据えておいた。

君待橋が新しく建造されるに当たって、市役所の公園建設課の職員がこれを知って、退職して自宅にいた私のところへ来て、この標石の由来を尋ねられたので、確かに千葉工業高校にある旨をはなし、当時の段木校長（第10代校長）に会って必要なら許可を得るように話しておいた。その後この標石は新君待橋のすぐそばの公園に据えられたという。

不思議な縁で君待橋の標石は千葉工業高校とその歩みを共にしたことになる。（現在生実校舎坂上にある標石はレプリカである。）

⑤県高等学校野球連盟と千工高

私が県高野連（正式には千葉県高等学校野球連盟という）の会長になってから今日まで、当校長は会長または副会長とし、又事務局として県高野連発展の歴史上に大きな足跡を残している。

⑥蘇我踏切拡張のこと

千葉駅から学校まで、千葉工業高校行バスを全日制、定時制生徒の登校、下校に合わせて出してもらうように小湊バスに交渉した。ただ、途中の外房線の踏切が狭くて運行できないので不可能とのこと、直接国鉄（現在のＪＲ）側に拡張の申し入れをした。国鉄では「工事費の負担をすれば拡張します」とのことで、困って市長にお願いし、幸に千葉市が工事費（約150万円）を負担してくれることになり、これでバスの運行が実現した。

しばらくの間小湊バスが玄関前まで入って来てくれたが、現在は校門の下に千葉工業高校前のバス停留所ができて校内までは入って来ない。

⑦新校舎建設工事の入札について

何分に入札金額が大きかったので当時として県内業者は入札の資格がなくて、大平、清水、鹿島、大成、西松等の建設会社が県内の業者抜きで入札することになった。

入札の日に私は県の建築課に様子を見に行ったところ、入札の様子が全然ない。

後で判ったが、千葉県土建協会の鈴木 續氏が県の土木部に異議を申し立て、結局県内業者の連合したものを作って入札に加わることになり、この鈴木 續氏を代表とする連合体が落札した。

最も意欲的だった西松組は、その下請けをすることになった。校長室のある部分は西松組、正面と普通の教室の部分は県内2業者が受け持った。西松組施工の部分が良くできていると思う。

○おわりに

昭和20年（1945年）8月15日に太平洋戦争に敗戦した日本は、輸出振興を国是として工業生産の拡大を図り、漸くにして永い苦難の道を乗り越えて世界一の経済大国になった。

そして、今では却って膨大な貿易黒字を抱えたために、世界経済のバランスが崩れる状態に至った。今までとは逆に輸出をおさえ輸入を増やす、そのために内需を拡大して豊かな社会をつくる方向に転換せざるを得ない状態にある。

物を生産する第二次産業からサービス・情報中心の第三次産業、さらにはエレクトロニクス・原子力エネルギー・半導体・高度の科学技術を必要とする頭脳的な第四次産業（？）へと移行して来た。

大学入試に不利な関係から、産業高校は見捨てられて普通高校へと入学希望者の重点が移って来たので、入学生徒の質が近年目立って低下して来ている。

私の校長時代（昭和35年～44年）は国を挙げて輸出振興、科学技術第一主義のときで、千葉県も臨海工業地帯の造成等工業一色だったので、普通高校より工業高校の方が成績の優れた生徒が多数集まった。

今はその逆で誠に遺憾に堪えない。これらの悪い条件を克服して、創立60周年を契機にこの流れに沿って新しい教育内容を盛り込んださらに新しい方針と施策を立て、着実に発展していくよう祈っている。

3年前から新しい試みとして夏季休暇中の中学生の体験入学や職員が一体となって各中学を回っての千葉工業高校のＰＲ活動に努力されている姿を見て、頑張っておられるなと感謝している。

工業教育の今後の歩む道は誠にきびしいと痛感している。

学校の歴史を語るときには第二代校長北村 丘先生の功績は大きくたたえたいと思う。

二代校長　北村　丘先生
（昭13～28）

本稿は平成8年6月1日付で千葉工業同窓会が、「千葉県立千葉工業高等学校　創立60周年記念誌」として発行した冊子の中の、第5代学校長の景山徳二先生の論文『千葉工業の歴史を語る』より転載致しました。

卒業後65年、けじめのクラス会－C24B/C27B　植草　光春

2017（平成29）年10月29日（日）。この日は朝からの大雨。午後、ＪＲ西千葉駅前に近い＜鮨割烹みどリ＞に集まったのは総勢で７人。敗戦直後の1946（昭和21）年４月に県立千葉工業学校に入学した、「貧しい時代の申し子」たるかつての仲間、そして49年に新制工高に入った級友たち。83歳超の生き残りの集まりです。

この年が、千葉工高卒業後65年、そして平山善吉君が南極地域予備観測隊員中の最年少隊員ながら設営担当として1956年11月８日、観測船「宗谷」で晴海埠頭を出航してから60年ほど。節目の年だったのです。

因みに「南極地域予備観測隊」は初期の名称。

＜生者必滅会者定離＞－この日のクラス会は、こんな仏教語がそのまま当てはまる様（サマ）でした。C24BとC27Bのクラス会は2007（平成19）年3月24日の開催を最後に一昔越えの顔合わせでしたが、何ともまあ！。

５年制の千葉工業学校に入学した津田沼校舎１期生の、工業化学科Ｂ組は総員37人でした。この年の入学生には、各科とも年齢差が５歳ほどあったのです。当時、尋常高等小学校尋常科６年終了予定者から受験資格ができ、高等科の修了者、敗戦で帰郷した元兵士にとっては、中学校が人生の再出発点だったのです。

鉄道省が管轄する省線電車の踏み切りを越えた鉄道第2 連隊兵舎から同連隊材料廠跡の校舎まで、机と椅子を運び込むのが入学後最初の授業で、毎週土曜日の検見川校での「農耕」も学業の一環だったのです。

学制改革のあおりでこのクラスは、1949年３月に千葉工業高等学校併設中学校を卒業した者14人。同数が新制の工高に入学してきていて、持ち上がり共でやはり37人でした。「併設中学校卒でも、３年間を労苦の中で学業に精出した級友なのだから同士だ」をモットーに始めたクラス会ですから、総員は51人のはず。

会を前に消息を当たったところ、併設中学校卒業者14人のうち生存確認者が２人。工高卒業者の37人のうち同確認者は14人でした。当日の出席者は中卒者が１人、持ち上がり４人、工高入学者２人だったのです。

トシがトシです。欠席者には所用の２人を別にして、悪疾罹患との返信も。出席者にしても、うち４人がその過去を持つ者ですから、「日本人の二人に一人…」との説の重みを、ここでも実感させられるのです。

近況は各人各様です 。 C24Bの三代川厳君は声帯を失っていましたが、文明の利器たるディスプレー使用で会話もスムーズにこなせるのです。何より語彙の多い人（じん）でしたからこそのことでしょう。以下、C27Bの面々。伊藤芳治君は日に5,000歩を歩く、月に３回はテニスに参加し、篆刻・絵手紙までしている。亀山継夫君は日本ユネスコ協会役員から地域の公的活動など多忙に過ごしている。長谷川幸雄君は丈夫のカタマリ。弁も達者だが、僅かに病の陰が差してきたようだ。花島功君は病後に趣味の釣を諦め、自動車の免許も返上。囲碁を楽しんでいるとか。平山君はアンコールワットの修復で年に４～５回ほどカンボジア通いをしているとのこと。植草光春は2002年以降に罹患した血管系と悪疾なども寛解状態になり、家事と脳トレに励んでいる。などなど人それぞれで…。

加えて、かつてのモダンボーイからの摩訶不思議な＜快談＞などもあって、予定の時間内を十分に堪能し、過ごせた１日でした。「再会を期す」は各人の望みであっても、そればかりは、どうにもネ。

左から三代川、花島、植草、亀山、平山、伊藤、長谷川